



Title	1990年代前半の日本における初期ネットレーベルによる音楽シーンの形成と展開
Author(s)	菊池, 虎太郎
Citation	グローバル人文学研究交流会要旨集. 2025, 1, p. 112-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100503
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1990 年代前半の日本における初期ネットレーベルによる音楽シーンの形成と展開

菊池虎太郎（芸術学・D1）

1. はじめに

発表者はこれまで、博士前期課程及び博士後期課程一年次を通じて、戦後日本のポピュラー音楽文化における欧米圏からの影響について、特に 1990 年代の日本のロック音楽の構造転換に注目した研究を行ってきた。

より具体的には、日本国内で活動するロックバンドを示す名称としてごく一般的に用いられている「邦ロック」「邦楽ロック」がいち音楽ジャンルとして形成された過程について、ロック音楽専門雑誌を中心とした活字メディアに注目した分析を実施した。

その結果、1985 年以降のバンドブームと J-POP の全面化、大型 CD 小売店の全国展開といった複合的な要因によってバブル化し空前の好景気を記録した音楽産業の状況ばかりが先行研究では注目される中で、むしろその期間に洋楽の売り上げが現在に至るまで長期的に低迷し、これまで「進んだ洋楽/遅れた邦楽」というイデオロギーに基づいた価値判断を実施してきた既存のロック・ジャーナリズムの権威がリアリティを失ったことが明らかとなった。

そのような状況下で『ロッキング・オン・ジャパン』及びそれに追従した新興雑誌メディアらは、バンドブームを経て大衆化したロックとは異なる価値基準を駆動させるために、当時全国的なムーブメントに発達しながらもミュージシャンとリスナーの双方で洗練された文化としての真正さが承認された「渋谷系」と呼ばれる音楽ジャンルに注目し、独自のシーンを開拓していった。

それ以降、1990 年代末をピークに 100 万枚を超えるセールスが常態化する CD バブルの状況が全面化する中で、『ロッキング・オン・ジャパン』らは、同時期のメインストリームのポピュラー音楽が取り入れてこなかったルーツを表明するミュージシャンを積極的に注目し、その影響下にあるミュージシャン群とともに〈邦楽ロック〉というジャンルが形成されていった。

しかしながら、雑誌メディアへの一面的な注目のみではポスト・インターネット時代における日本のロック音楽の構造転換について十分な検討を試みているとは言い難い。2007 年に設立されたポピュラー音楽情報サイトの「音楽ナタリー」は現在に至るまで一定の影響力を有しているように見えるし、『ロッキング・オン・ジャパン』に掲載されるロックバンドを好む若者を揶揄するネットミームとしての「ロキノ厨」の語は 2000 年代を通じて広く拡散した。

また、米国の例を見ると、「ピッチフォーク・メディア」のアーケイド・ファイアの注目に端を発する US インディー・ロックのムーブメントのように 2000 年代ではインターネット上の批評メディアがシーン全体を駆動させる影響力を持つようになっていった。

このように、1990 年代中期以降一般家庭レベルに普及したインターネット上における諸実践及びメディア上の言説は、1990 年代末をピークに急速に影響力を落としていった雑誌メディアと反比例するようにその影響力を拡大させていったことは明らかであり、その日本における状況を分析することは必要不可欠であると考ええる。

それを踏まえ本発表では、1990 年代前半の日本のポピュラー音楽におけるインターネット上の音楽実践について、特にインターネット上で独立的に運営され楽曲を配信するレコードレーベル（以下ネットレーベル）に注目し、ネットレーベルがインターネット上の初期の音楽シーンの形成における重要なメディアとして機能していたことを明らかにする。本発表は、ポピュラー音楽研究に専門の学会発表ではない性質上、ポピュラー音楽研究の基本的な議論の枠組みを述べた上で、本研究における重要な諸先行研究を紹介、及び現在調査中の研究対象を紹介しながら、その文化的意義について考察するという構成からなる。

2. ポピュラー音楽研究の枠組み

そもそも、ポピュラー音楽とは西洋芸術音楽、すなわち所謂クラシック音楽や、各地域で伝承される芸能のような民族

音楽ではない様々な音楽を示す大まかな括りである。

ポピュラー音楽を対象とする学術研究は、テオドール・アドルノによるポピュラー音楽批判によって始まるのはよく知られたところである。特に、「ポピュラー音楽について」という 1941 年の論文は、西洋芸術音楽と当時最新の流行音楽であったジャズを比較する中で、ジャズを資本主義のシステムに組み込まれ魂を失った音楽として痛烈に批判した内容であった(Adorno, 1941=村田訳, 2002)。ポピュラー音楽研究は、アドルノのポピュラー音楽批判に対する反駁を経て徐々に体系化されてきたという歴史的な経緯を有する学問領域である。

ポピュラー音楽における重要な前提として、20 世紀以降の大量生産・大量複製によって販売される商品であると同時に、素朴に、私たちの誰もが音楽を聴いて感動したという体験があるように、様々な情動を喚起させる表現文化としての二重性を有している点が挙げられる。

また例えば、音楽雑誌や、ディスクガイド、そして音楽レビューサイトといった、ポピュラー音楽について扱った文字メディアは、商品について扱う以上、商品の販売促進すなわち広告の役割を担っているにもかかわらず、様々な批評の用語を用いて、ポピュラー音楽の表現文化としての側面を強調する。つまり、商品ではないという意匠を殊更に示すことで、逆説的にその市場における価値を高める批評を掲載する文字メディアは、単なる商品のレコメンデーションを超えて送り手と受け手を媒介する役割を担うという点で、重要な研究対象であると考ええる。

3. 本発表の射程

本発表において注目するポピュラー音楽におけるシーン(scene)とは、多様な参与者による音楽実践が相互に作用して生じる文化的空間である(Straw, 1991)。1980 年代の欧米におけるオルタナティブロックのシーンは、ラジオや音楽雑誌などのメディアに媒介されることで大きなムーブメントとなったように、音楽シーンの拡散と受容の過程におけるメディアの役割は極めて重大である。

インターネット上の音楽実践における諸研究としては、その先駆的な成果として津田(2004)や Kusek&Leonhard(2005)などが挙げられ、インターネットの出現によって変容したメディア環境によって規定される新たな音楽文化の形を示してきた。これらの先行研究は、インターネットの登場と普及によって出現した「配信」という形の音楽の販売方式が音楽市場に与えた経済的なインパクトや、録音物(ソフト)の販売に偏重している既存の音楽産業の構造に対して、容易にコピーが可能なデジタルデータは既存の著作権にどのような影響を与えるかを分析している。

ネットレーベルに関する研究としては、Galuszka, Patryk(2012)や日高(2013)などが挙げられる。Galuszka, Patryk(2012)は量的手法を含めた経済学的な調査に基づきネットレーベルが既存の固定化・寡占化した音楽産業に対する「民主化」のいちプロセスであることを指摘した。また、日高(2013)は Maltine Records, Vol. 4 Records といった 2000 年代後半に設立され、2010 年代に大きな影響力を持った日本のネットレーベルの活動を参照しながら、それらの持つ文化的な独自性とそれがはらむ問題を指摘している。

その一方で、これらの先行研究はもっぱらインターネットの登場が音楽市場に与えた経済的な影響の分析、あるいは最新の文化潮流としてのインターネット上の音楽実践の紹介にとどまっており、ネットレーベルをメディア史の文脈に組み込んだ歴史化の試みは十分ではないと発表者は考える。

より広くインターネット上の大衆文化研究について概観しても、その多くは一般家庭にまでインターネットが普及したメルクマールとされるオペレーティングシステムであるウィンドウズ 95 の登場以降の分析が多く、それ以前のインターネット上における文化実践への注目はいまだ十分であるとはいえない。

それらを踏まえて、発表者はこれまでの調査の結果、日本には 1990 年代前半より複数のネットレーベルが存在、1980 年代以降日本の各都市で形成されたインディーズ・シーンと密接に関連しながら継続的に運営されてきたことを分析している。

発表者はこれまで、2024 年度提出の修士学位論文及び 2025 年掲載予定の投稿論文において、1990 年代の音楽雑誌を対象とした歴史的な分析を試みており、1990 年代における日本のロック音楽文化がこれまでの西洋中心主義的な音楽文化の影響を背景化し、相対的な自立性を獲得した過程を指摘してきた。

本発表では、それらの成果を受け継ぎながら応用的に発展させ、広く人文学の領域に应用可能なインターネット黎明期における大衆文化実践の諸相を明らかにしていく。

参考文献

Adorno, Theodor, W. (1941). "On Popular Music". Studies in Philosophy and Social Science, IX, Institute of Social

- Research, 17-48. (=村田公一(訳) (2002). 「ポピュラー音楽について」 渡辺裕(編) 『アドルノ 音楽・メディア論集』 平凡社, 137-207.)
- Galuszka, Patryk. (2012). “Netlabel and democratization of the recording industry” First Monday, 17(7). <https://doi.org/10.5210/fm.v17i7.3770>, 2025/01/30 最終閲覧.
- 日高良祐(2013) 「ネットレーベルの構造—楽曲の流動性とコミュニケーションへの依存—」 『音楽文化学論集』 (3) 167-177.
- Kusek&Leonard. (2005). The Future Of Music: Manifesto For The Digital Music Revolution. Boston: Berkelee Press.
- (=y o m o y o m o (訳) (2005). 『デジタル音楽の行方——音楽産業の死と再生, 音楽はネットを越える』 翔泳社.)
- Straw. W. (1991). “System of Articulation, Logic of Change: Communities and Scenes in Popular Music,” Cultural studies, 5 (3), 368-338.
- 津田大介 (2004). 『だれが「音楽」を殺すのか?』 翔泳社.